埼玉大学文化科学研究科修士課程学位論文・特定課題研究成果要旨

研究専攻（専門領域）	文化環境研究専攻(文化人類学)	学籍番号	07CS015
氏名　中川　渚	ローマ字　NAKAGAWA Nagisa	国籍（留学生）	

修士学位論文名	ペルー北部形成期における遺跡間関係の変容プロセス ―領域とネットワークの重層的関係から―		
提出年月日	2010 年 1 月 12 日	指導教員	井口　欣也
体裁 （　　）	87 頁（1 頁文字数 1400 字）	言語	日本語
別冊添付資料等			
キーワード	アンデス形成期　遺跡間関係　相互関係領域　ネットワーク		

本論では、アンデス形成期前期から後期（紀元前 1800 年から紀元前 250 年）を対象として、相互関係領域とネットワークの視点を用いて、遺跡間関係の変容プロセスを明らかにすることを目的とする。先行研究では、遺跡間関係を相互関係領域とネットワークの２つの視点から捉えてきた。しかし、遺跡間関係の変容プロセスを明らかにするためには、その両方の視点を用いて分析することが必要である。また、これまでの中央アンデス全域というマクロな視野や、各遺跡を対象とした局所的なミクロの視野では捉えきれなかった、「地域」の視野で分析することで、今後の形成期研究に貢献できると考えられる。本論では、祭祀センターが多く、先行研究でも注目されてきたペルー北部を対象地域として、この問題に取り組む。

具体的な分析では、相互関係領域を明らかにするために土器様式の分布を、ネットワークを明らかにするために産地が限定される遺物を用いる。土器は社会組織や交換、信仰と結びついて存在するものであり、土器様式の分布について分析することで、社会組織、交換関係、信仰が相互作用する相互関係領域を明らかにすることができる。一方で、黒曜石のように産地が限定され、長距離交易によって運ばれたと考えられるものは、移動コストがかかる長距離交易ネットワークに参加することが必要となる。その参加決定は各集団の選択性に強く依存するため、産地が限定される遺物は、遺跡間関係をネットワークの視点で分析する場合に有効な資料である。

以上の分析から、形成期前期から形成期後期にかけての遺跡間関係の変容プロセスが明らかとなった。形成期前期と形成期中期では、相互関係領域の視点が有効となるが、形成期後期前半ではネットワークの視点を用いることで、ペルー北部形成期のよりよい説明が可能となった。長距離交易ネットワークの参加状況の違いによって、各遺跡の変容プロセスは異なってくることが明らかとなったのである。また、形成期後期前半の相互関係領域は、長距離交易ネットワークと関連性を持って変化していたことが判明した。